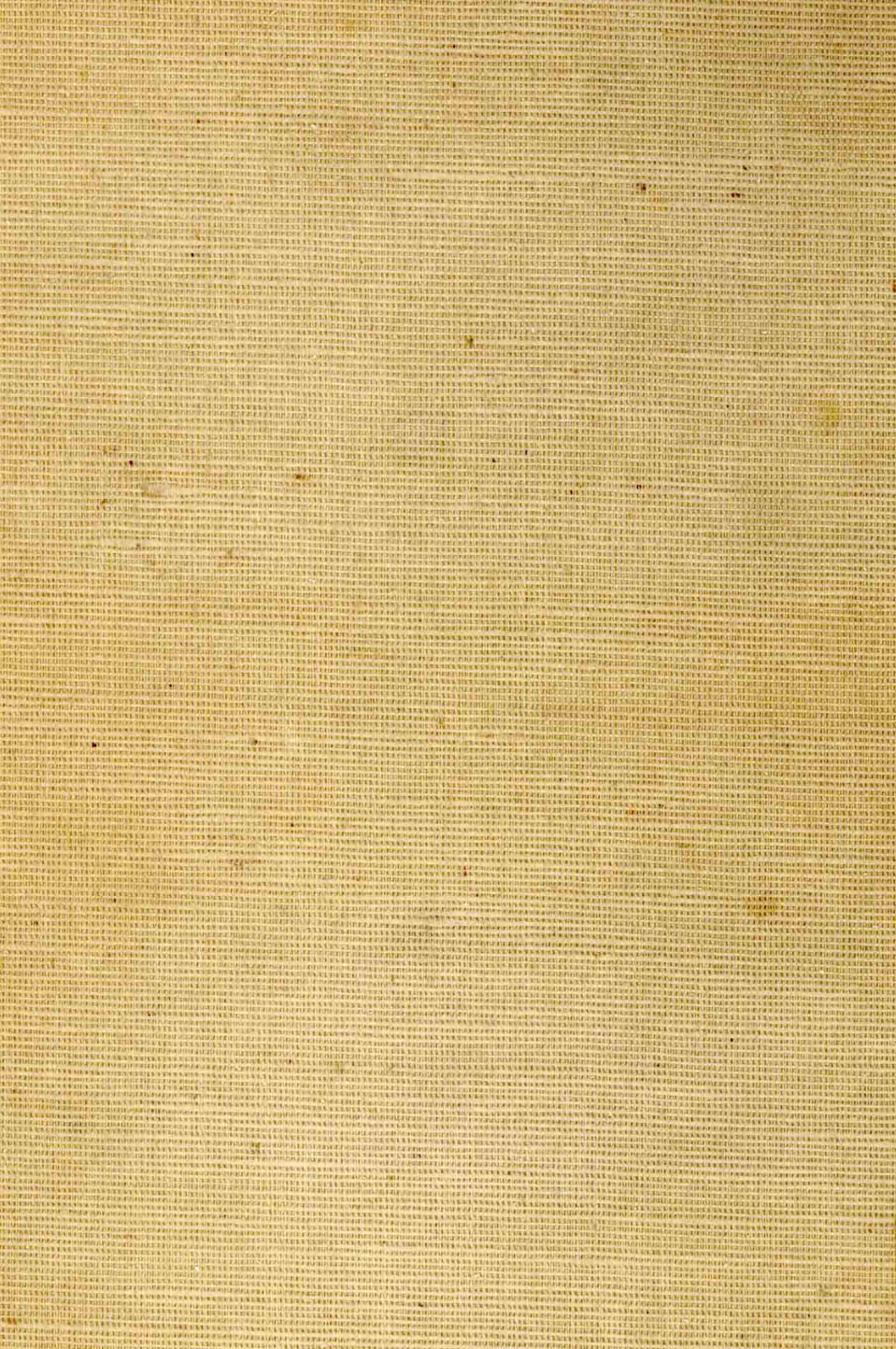




白井吉見  
作家論控え帳

筑摩書房

作家論控え帳

一九七七年四月二五日第一刷発行

著者 臼井吉見

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一―七六五一（代表）

振替東京六―四一二三

郵便番号 一〇―一九一

明和印刷 矢島製本

©一九七七 臼井吉見

（分類） 0095

（製品） 82093

（出版社） 4604

# 作家論控え帳

## 目次

|   |           |     |
|---|-----------|-----|
| 一 | 幸田露伴      | 三   |
| 二 | 島崎藤村      | 元   |
|   | 透谷と藤村     | 元   |
|   | 三つの恋      | 元   |
|   | モデル問題     | 四   |
|   | 「旧主人」     | 六   |
| 三 | 徳田秋声      | 八   |
| 四 | 正宗白鳥      | 一〇三 |
|   | 享樂家のエゴイズム | 一〇三 |
|   | 舶来的野暮     | 一〇  |
|   | 「読書雜記」    | 一七  |
|   | 「人生恐怖図」   | 一八  |
|   | 「一つの秘密」   | 二〇  |
|   | うしろすがた    | 二三  |
| 五 | 永井荷風      | 二七  |

詩人

二七

小説家

三四

同居人

一四

訃報を聞いて

一四

## 六 斎藤茂吉

一五

歌業

一五

方法

一五

茂吉と人麿

一五

「みだれ髪」と「赤光」

一五

一語への妄執

一八

「ともしび」

一八

「たかはら」

一九

「連山」

一九

「白き山」

一九

「作歌四十年」

一九

「茂吉秀歌」

二〇

追悼 その一 101

追悼 その二 104

七 高村光太郎 106

「牛」ほか二篇 108

山口村の老彫刻家 114

近代日本の問題 116

八 谷崎潤一郎 119

潤一郎素描 119

「細雪」 115

さまざまの論議 116

「鍵」 その一 111

「鍵」 その二 114

新訳谷崎源氏に寄せて 112

九 武者小路実篤 114

一〇 志賀直哉 117

|    |                   |     |
|----|-------------------|-----|
|    | リアリティについて         | 二七七 |
|    | 文章について            | 二八三 |
|    | 「祖父」と「白い線」と「いたづら」 | 二九二 |
|    | 死について             | 二九六 |
| 一一 | 佐藤春夫              | 二九八 |
|    | 美的享楽派             | 二九八 |
|    | 短篇四つ              | 三〇四 |
| 一二 | 芥川龍之介             | 三〇九 |
|    | 「木曾義仲論」をめぐって      | 三〇九 |
|    | 短篇五つ              | 三二三 |
|    | 河童忌に寄せて           | 三三九 |
| 一三 | 久保田万太郎            | 三四三 |
| 一四 | 宇野浩二              | 三五三 |
| 一五 | 宮本百合子             | 三六七 |
|    | 連続のリズム            | 三六七 |

宮本百合子氏へ 三六三

「貧しき人々の群」 三九〇

昭和二十五年十二月某日 三九一

一六 中野重治 三九四

お前は歌うな 三九四

「過小評価」のこと 四二〇

「国会演説集」 四二五

「鷗外その側面」 四二八

「話四つ・つけたり一つ」 四二九

「話すことと書くこと」 四三三

「わが読書案内」 四三五

「第三班長と木島一等兵」ほか 四三七

「広重」 四四〇

「むらぎも」 四四三

「梨の花」 四四四

瞥見したこと 四七

一七 小林秀雄 四五二

一八 堀 辰雄 四五八

小島よ 肺結核よ 四五九

「花あしび」 四六三

一九 横光利一 四六九

二〇 川端康成 四七六

二一 井伏鱒二 四八五

古典主義的 四八五

恐るべき読者 四八八

二二 武田麟太郎 四九一

二三 中島 敦 五二四

二四 坂口安吾 五二三

二五 太宰 治 五二五

鎖のまま 五二五

太宰治の笑い 五五四

「人間失格」 五五〇

あの一夜とその翌朝 五五四

二六 椎名麟三 五五七

廃墟から来た人 五五七

椎名麟三氏へ 五五二

「永遠なる序章」 五七九

「美しい女」 五八四

二七 野間 宏 五八七

暗い青春 五八七

「真空地帯」 五九三

戦争体験 五九四

二八 武田泰淳 五九七

あの子の姿勢 五九七

「異形の者」 六〇九

二九 井上 靖

六三三

短篇四つ

六三三

「しろばんば」

六三七

三〇 三島由紀夫

六三〇

「中世」

六三〇

二つの短篇集

六三三

「秘楽」

六三四

「沈める滝」

六三六

「金閣寺」

六三八

「鏡子の家」

六三二

「絹と明察」

六三三

「若人よ蘇れ」

六三五

「剣」

六三六

「三熊野詣」

六三八

「宴のあと」とプライバシー

六三九

三一 安岡章太郎 六四二

三二 吉行淳之介 六四七

三三 大江健三郎 五二

あとがき 五九

# 作家論控え帳



## 一 幸田露伴

露伴が死んで、ついに最後の人が去ったという感が深い。

経済学を科学的に追求し、唯物論を信奉して戦った河上肇博士が、良寛さまのような歌、禪坊主のような詩を残したこと、また近代個人主義を文学の上に確立しようとして苦しんだ漱石が、碧水碧山何有我というような詩を作ったり、則天去私にたどりついたことに関連して、唐木順三が一つの問題を提出していた（『近代と現代』）。つまり日本においては、ある意味で最も近代的な人であったといえるこの二人にとって、マルクスも、近代文学も、結局はぬぎすてられた旅ごろもにすぎなかったのではないか、というところからはじまって、一つの大きな問題——近代の限界とそれを超える方向をさぐるうとしたものであった。もとより、これについては異論もあろう。日本の社会環境の後進性をまず挙げるにちがいない。この二人の個人的な特殊事情をもちだすこともできる。だが、それだけで割きつてしまえないものがある。ただ、この場合、「旅ごろも」は途上で着用して、宿に着いたらぬぎすてたというような性質のものではないだろう。途上でも、宿へ着いてからでも、ぬいだり、着たりしたものではなからうか。河上肇の場合はよく知らないが、漱石は間違いなくそういうふうのものだっと思われる。だから、「旅ごろも」とよぶのは必ずしも当たらない。ここにいう「旅ごろも」も「則天去私」も、その双方の同時的着用のなかに、文学者漱石の面貌が、広くいって近代日本文学の表情

が浮びあがってくるのではなからうか？

ところで、露伴になると、この「旅ごろも」を、およそただの一度も身につけたことのない人である。小説についていつてみても、明治二十二年の「風流伝」から、最後の作品となった昭和十六年の「連環記」にいたるまで、儒教的精神と仏教的諦念とを中核としたその世界は、あまりにも変りがない。半世紀以上にわたって、いささかの変貌も見せていない。これくらい徹頭徹尾、近代とかかわりのない場所で、悠々と東洋的理想主義を生きつづけた文学者というものは、露伴を最後としておそろく一人もあるまい。河上肇の詩集「旅人」に現れているもの、漱石が則天去私の四字に吐露したところのもの、露伴はそういうもので、あの長い生涯をおしきっている。

「慾を捨て道に至る人といふものは、多くは人生の蹉跎にあつたり、失敗窮困に陥つたりして、そして一旦開悟して頭を回らして今まで歩を進めた路とは反対の路へ歩むものであるが、保胤には然様した機縁があつて、それから転向したとは見えない。自然に和易の性、慈仁の心が普通人より長けた人で、そして儒教の仁、仏道の慈といふことを、素直に受入れて、人は然様あるべきだと信じ、然様ありたいと念じ、学問修証の漸く進むに連れて、愈々日に月に其傾向を募らせ、又其傾向の愈々募らんことを祈求して已まぬのをば、是真実道、は無上道、是清浄道、是安樂道と信じてゐたに疑無い。」

「連環記」の主人公、慶滋保胤について書かれているが、作者自身を語る言葉にもなっているように思う。少なくとも、やがて剃髪して寂心と名のつた保胤の生涯に、どのような親近感を抱いたかは、鷗外が渋江抽斎におけるごときものであらう。保胤と抽斎とのちがいは、すなわち露伴と鷗外のちがいであらう。